

妹勢能山詠の諸問題

村瀬 憲夫

はじめに

万葉集巻七雜歌部「羈旅作」の項の末尾に、「柿本朝臣人麻呂之歌集」所出の歌が四首収められている。その四首歌群の冒頭は次の歌で飾られている。

おほあなみちすくなくみかみ
大穴道少御神の作らしし妹勢能山を見らくしよしも

⑦一二四七、柿本朝臣人麻呂歌集

この歌の他に十四首、計十五首の妹之山（妹山）・勢能山（背山）の歌が万葉集には見える。本稿では、この妹之山・勢能山の歌に関わる諸問題に種々の側面から考察を加えたい。本書のテーマである「編纂・構成」も、個々の歌、個々の事象の具体的個別的な検討の積み重ねのうえに成るものであると考える。

一 妹之山（妹山）・勢能山（背山）の歌の所在

まず妹之山・勢能山の歌を列举しておく。作歌年代の記されたもの乃至は推定できるものをほぼ年代順に並べ、その後には作歌年代不詳のものを巻毎の配列順に並べ、通し番号を付した。

1 勢能山を越ゆる時に、阿閉皇女の作らす歌

1 これやこの大和にしては我が恋ふる紀路きぢにありといふ名に負ふ勢能山
 (①三五、阿閉皇女、持統四年六九〇)

2 たくひれの懸けまく欲ほしき妹の名をこの勢能山にかけばいかにあらむ 一に云ふ、かへばいかにあらむ
 丹比真人笠麻呂たぢひのまひとかさまろ、紀伊国に往き、勢能山を越ゆる時に作る歌一首
 (③二八五、丹比笠麻呂、持統・文武朝)

3 宜よろしなへ我が背の君が負ひ来にしこの勢能山いもを妹とは呼ばじ
 春日藏首老かすがのくらおびとおゆ、即ち和こたふる歌一首

(③二八六、春日藏老、持統・文武朝)

4 勢能山いもに黄葉もみぢ常敷く神岡かみをかの山の黄葉は今日か散るらむ
 大宝元年辛丑の冬の十月に、太上天皇おほさまめらみこと・大行天皇さまのすめらみこと、紀伊国に幸す時の歌十三首（うちの第一〇首）

(④一六七六、作者未詳、大宝元年七〇二)

小田事の勢能山の歌一首

5 真木の葉のしなふ勢能山しのはずて我が越え行けば木の葉知りけむ

(③一九一、小田事、文武・元明朝)

神亀元年甲子の冬の十月に、紀伊国に幸す時に、従駕の人に贈らむために娘子に誂へられて笠朝臣金村の作る歌一首 并せて短歌(うちの第一短歌)

6 後れ居て恋ひつつあらずは紀伊の国の妹背乃山にあらましものを

(④五四四、笠金村、神亀元年七二四)

7 麻衣着ればなつかし紀伊の国の妹背之山に麻蒔く我妹

(⑦二一九五、藤原卿、神亀元年七二四か)

8 紀伊道にこそ妹山ありといへ玉くしげ二上山も妹こそありけれ

(⑦二〇九八、作者未詳)

9 勢能山に直に向へる妹之山こと許せやも打橋渡す

(⑦二一九三、作者未詳)

10 人にあらば母が愛子そあさもよし紀の川の辺の妹与背之山

(⑦二二〇九、作者未詳)

11 我妹子に我が恋ひ行けばともしくも並び居るかも妹与勢能山

(⑦二二一〇、作者未詳)

12 妹に恋ひ我が越え行けば勢能山の妹に恋ひずてあるがともしき

(⑦二二〇八、作者未詳)

13 妹があたり今そ我が行く目のみだに我に見えこそ言問はずとも

(⑦二二一一、作者未詳)

14 大穴道少御神の作らしし妹勢能山を見らくしよしも

(⑦二二四七、柿本朝臣人麻呂歌集)

15 紀伊の国の 浜に寄るといふ 鮑玉 拾はむと言ひて 妹乃山 勢能山越えて 行きし君 いつ来まさむ

(⑬三三一八、作者未詳)

と 玉梓の 道に出で立ち 夕占を 我が問ひしかば……

以上の十五首である。ただ13の二二一番歌については、妹之山を詠んだ歌として数えず、計十四首とされている場合も多い。しかし当該歌の巻七における配列様態から考えて、「妹があたり」の「妹」には、「妹(恋人)」と「妹之山」の両方の意が含まれていることは間違いない。つまり当該歌は紀伊国関係の歌を収めた歌群の中にあり、しかも当該歌の直前に置かれた四首(⑦二九三、二二〇九、二二一〇、二二〇八)にはいづれも妹之山・勢能山が詠まれているから、当該歌も妹之山を詠んだ歌として、採択されこの位置に配されたと考えてよい。

1～7が、作歌年代のほぼ判明するもの、8～15が作歌年代不詳のものである。本稿の冒頭に掲げた人麻呂歌集所出の二二四七番歌については、ひとまず作歌年代不詳のグループの14に入れてあるが、この歌は本稿で扱った主要な問題のひとつであるので、後に詳しく検討する。

二 妹之山・勢能山の所在

二一 勢能山の所在

勢能山の所在については、すでに『日本書紀』大化二年(六四六)正月一日条に、次のように見える。

凡そ畿内は、東は名壑の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭狭波の合坂山より以来を、畿内国とす。

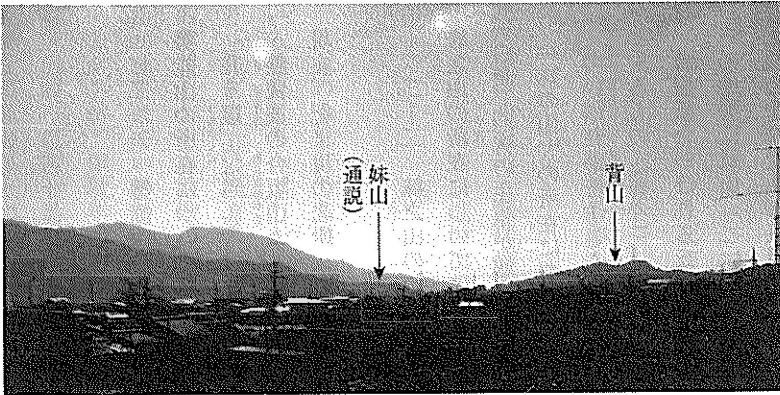
現在、紀ノ川の北岸(右岸)、伊都郡かつらぎ町背ノ山にある背山(標高一六八メートル)である。異説はない。

二二 妹之山の所在—景觀—

妹之山の所在については、犬養孝「妹と背の山考—旅ごころ—」(『萬葉の風土』(統)一九七二年、塙書房。初出は一九六〇年)の次の主張が通説となっている。

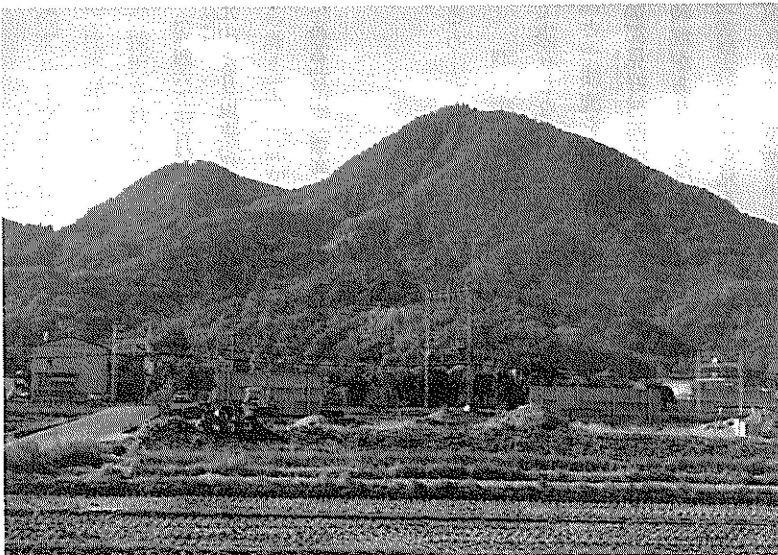
「妹の山」の所在については異説多く、詞のあやのみで実在しないとするもの(『玉勝間』等)、背ノ山の二峯のいづれかとするもの(本居内遠『妹山背山弁』)、背ノ山と一溪流を隔て背ノ山と並んで紀ノ川北岸にあるとするもの(『新考』)、紀ノ川南岸で背ノ山と相對した伊都郡見好村西波田(現在、かつらぎ町に属す)に属する長者屋敷といはれる丘とするもの(『紀伊統風土記』等)等諸説があり、なほこれについては後述するが、五万分の地図に妹山(二四メートル)とある統風土記の説の長者屋敷の丘と見るべきである。

ところが妹之山に長者屋敷説には疑問もある。例えば澤瀉久孝著『萬葉集注釋』(卷第三、卷第七)(一九五八年、



写真A 背山と妹山(通説)

〔撮影地：和歌山県伊都郡かつらぎ町大谷の中谷川の堤〕(木村哲也氏撮影)



写真B 二上山〔撮影地：奈良県北葛城郡当麻町今在家付近〕(常本浩氏撮影)



写真C 背山

〔撮影地：和歌山県伊都郡かつらぎ町佐野の佐野廃寺跡付近〕（木村哲也氏撮影）

一九六〇年、中央公論社）が

今紀の川をへだてて対岸にも山はあるが、妹背と並び称するにふさはしい形になつてゐない。

（③一八五の注釈）

背山ははつきり独立した山であるが、対岸の山は幾重にも重なつてゐて、前方の山は背山程の高さであるがそのうしろは背山よりも高くなつてをり、妹背といふにふさはしくない感である……

（⑦一〇九八の注釈）

と、長者屋敷の景観が、妹・背と並び称するには不適切であると指摘している。写真Aからも判断されるように、誠にもつともな指摘である。

また8の一〇九八番歌は、紀伊道にある妹之山を通して、大和の二上山にも雄岳・雌岳の二峰があること、すなわち妹之山があることに改めて気付いたという趣旨の歌である。写真Bの二上山の山容からも容易に納得できるように、背山と長者屋敷とで成す妹・背の景観は、二上山の景観とは大きく異なる⁽³⁾。妹之山⁽⁴⁾

長者屋敷説は再検討の要がある。

ここにおいて本居内遠（一七九二年生、一八五五年没。和歌山藩に仕えた。本居大平の養子）の説が顧みられる。

元来背の山と云るは、此所にて兩岸の山相狹て、咽喉をなせるより、往古畿内の界ともせられ、いまも伊都那賀の郡界ともなれば、追山と云てありしを、此山の峯二ありて、相並し形象あるより、風騒の土、その元来の迫の山の名を、妹妹の義に取なして、詠じ来れるより、名高くなりたれども、此山を總ていふには、背の山と従来のま、に云もし、物に記しもする事にて、妹の山背の山と云るは、文人の詞章にのみ最初は云て、何の方の峯を妹の山とも背の山とも、定めて喚分たるには非ず、只峯二あるより云るなれば、後々までも、背の山の名は従来のま、に、山の名にも村の名にも残れるを、妹山は確に何と定めたる方なければ、知らずなりて、……

〔本居内遠「妹山背山弁」〕〔本居内遠全集〕〔本居宣長全集〕（第十二卷）

背山は二つの峰を持つ（写真C参照）。ひとつは城山（背山の東北側の峰。写真Cの右の峰。標高一六八メートル）であり、ひとつは鉢伏山（背山の東南側。写真Cの左の峰。標高一六三メートル）である。この二つの峰が織りなす景観が、（いずれの峰を妹山とするかは特定できないが）妹之山・勢能山であったと、本居内遠は主張するのである。

本居宣長も、8の一〇九八番歌に触れて

「二上山も妹こそありけれ」とよめるも、二上山に、まこと妹といふがあるにはあらねど、峯二つあるによりて、まうけてさはよみつるなれば、きの国なるも兄の山といふ名につきて、さもいふべきこと也。

〔妹背山〕〔玉かつま〕（九の巻）

と述べている。妹之山の所在を考える際に、二上山の山容は無視できない。さらに言えば、上代の文献に現れる筑波山にしろ、越中国の二上山にしろ、二峰を持つ山は男女、妹背の発想を持って捉えられている。また筑紫国の「杵嶋」は、三つの峰を持つが、ひとつを「比古神」、ひとつを「比売神」、ひとつを「御子神」と称して、夫婦とその子という発想を持っているのである(『風土記』〔逸文〕)。紀伊国の妹之山・勢能山の発想も、二峰の山容に由来するとみるのがよいと思われる。

二一三 妹之山の所在―旅びとのまなざし―

この内達の主張の正当性は、種々の側面から検証できるように思う。以下具体的に検証していこう。まず注目しておくべきは、妹之山が歌われるようになるのは、万葉後期に入ってからであるということである。作歌年代の分かる歌の中で、妹之山詠の初出は、6の五四四番歌である。この歌は題詞によれば、神亀元年(七二四)十月の聖武天皇紀伊国行幸の折の作である。7の一・一九五番の藤原卿の詠も、神亀元年の行幸時の作と推定してよい。

そして妹之山詠が後期に現れることと深く関連して注目すべきは、2、3の二八五と二八六番歌のやり取りである。二八五番歌は、「勢能山」に、旅にあっていつも心に懸かって離れない「妹」という名を付けたらどうだろう、つまり「勢能山」改め「妹之山」としたらどうだろうと提案した歌である。したがって丹比笠麻呂と春日歳老がこの歌を詠んだ時、目の前に妹之山が存在したならば、このようなやり取りはあり得なかつたはずである。この時点では妹之山は存在しなかつたのである。

さらに注意せられるのは、すでに犬養孝論文(前掲)が指摘しているように、「勢能山」の「セ」から「背」が

連想され、その「背山」から「妹」が連想されているということである。この連想が、(當時は存在しなかった) 妹之山をその後生み出していく原動力となったと考えられる。妹之山は、妻・恋人を家郷(都)に残して道行く旅びと(都びと)が、背と妹との連想の中で作りあげていった山の名だったのである。妹之山が歌に詠まれるのが、万葉後期を待たなければならぬのは、このことと深く関連していると言えよう。

このように見てくると、妹之山の所在の確定は、この地を道行く旅びとの目線に従ってもなされるべきであるということになる。では旅びとの目線が捉えた勢能山の山容はどのようなものであったのか。そのためには、当時の南海道の道筋を確かめる必要がある。幸い地元在住の木村哲也氏を中心とする「笠田万葉サークル」の方々の、地の利を活かした地道で根気強い踏査の結果、真土山(大和国と紀伊国の国境に位置する)から背山へ至る道筋はかなり明らかになりつつある。ごく大雑把に言えば、紀ノ川の河岸段丘に沿っていた。つまり紀ノ川に沿って走る、現在の国道24号線よりも、かなり北側の山際を通っていたのである。このことは、最近の発掘調査によって次第に確かめられつつある。「柿田荘(窪・萩原遺跡)―紀ノ川流域下水道伊都浄化センター―建設に伴う発掘調査報告書―」(二〇〇〇年一月、財団法人和歌山県文化財センター)によれば、「かせだ柿田荘絵図」(平安時代末期の作と推定される)に描かれた「大道」(この道が古代の南海道の道筋を考える際に重要な指標となる)は、「下位段丘面」(標高は五〇〜六〇メートルほど。佐野から笠田中をへて窪まで広く分布している)に求めるのがよく、「現在のJ・Rの線路(和歌山線)もしくはそのさらに北側の現在の道あたりと考えて大過ない」という。この道々から見える背山は、二峰がくつきりと確認できる山容を持つ。写真Cは、当時の道筋近くにあった「佐野寺」(奈良時代前期の建立)の跡、「佐野(狭野)廃寺跡」付近から撮影したものである。当時の旅びとの目線は、二つの峰を持つ背山の山容をしっかりと捉えていたはずである。⁽⁵⁾

こうしてみる時、2、3に見られたような、都に残してきた妹を恋う旅びとの心が、目の前の背山の二峰を、妹之山(妹山)・勢能山(背山)と見なしていった、すなわち妹之山という山の名を作り出していった(命名していった)過程がよく理解でき納得できるのである。

二―四 妹之山の所在―背山二峰説の確認―

では内遠の妹勢能山―背山二峰説に依った場合、十五首の妹之山・勢能山の歌は一層適切に読めるかどうか、あるいは不都合の生じるものはないかどうかを確認しておきたい。

まず1の三五番歌は、持統天皇四年(六九〇)に行われた紀伊国行幸の折の作と考えられる。阿閉皇女が勢能山を感慨深く詠じたのは、単に大和で有名になっていた勢能山を、今日の当たりにした感激のみによるのではなく、前年の四月に亡くした夫(草壁皇子)への思いが連動しているからであろう。勢能山の「セ」に「背」が意識されていると見るべきであろう。稲岡耕二「大名持神社と人麻呂歌集―人麻呂の工房を探る(其の三)―」(『萬葉』第一八八号、二〇〇四・六)はすでに、「この勢能山越えの作は、雑歌に分類されてはいるが、山名(セ)に因む亡夫への相聞歌にほかならなかつただろう」と指摘している。

先に8の一〇九八番歌には二上山の二峰が強く意識されていることを見た。二上山と言えば、大津皇子が二上山に移葬された時、大伯皇女が詠んだ次の歌が想起せられる。

うつそみの人にある我や明日よりは二上山を弟世と我が見む

この歌はもちろん大津皇子の屍が移葬せられたからこそ、大伯皇女は二上山を詠んだのに違いないが、愛する

弟を「わが背子を大和へ遣る」(②一〇五)と嘆いた皇女であつてみれば、大和の二上山の二峰に妹背のうつしみの姿を見、その想いが、「二上山を弟世と我が見む」と詠ませたのであろう。深読みであるとの譏りは免れないが、勢能山の二峰を見る阿閉皇女の目に、大伯皇女と共通する想いを見ることが出来るのではないか。勢能山の二峰の山容は、すでにしてそのような想いを懐かせるものを持つていたのであろう。

6の五四四番歌は、都に残された娘子の立場で詠まれた歌であり、いわば想像の世界で詠まれたという設定であるから、妹之山が長者屋敷であつても背山の二峰であつてもどちらでもよい。ただ実際の景観を知る笠金村が詠じているという意味では、二峰説はより適切であらう。

7の一一九五番歌は、麻を蒔いている我妹を詠んでいるのだから、紀ノ川を挟んで対岸にある背山と妹山(長者屋敷)の二山で麻を蒔いている我妹を歌うのは、理屈としては不自然である。二峰説の方が適切である。

9の一一九三番歌については、興味深い先行研究がある。木下正俊「妹背山女男の打橋」(『萬葉』第七三号、一九七〇・二)である。木下論文は妹山⇨長者屋敷説をとる。当該歌に詠まれた「打橋」とは「訪れ来る男のため」に女が川門(渡渉場)に渡す橋、夫を受け入れようとするゆるしの橋」であると考え、「背山のそばの谷川にかけた丸木橋などとは思いたくない」としたうえで、紀ノ川の中洲にある島、いま船岡山と呼ばれている島こそ、背山と妹山(長者屋敷)の間に渡された打橋であると主張した。船岡山を打橋に見立てるといふ、誠にスケールの大きい風景に注目した、感銘深い論文である。

しかしながら当時の旅びとが取つたであろう道筋から考えて、この三山のきれいに並ぶ風景が、旅びとの目につくことは難しかった。三山の並ぶ風景は山際の道筋からは見えにくい。背山に近づけば近づくほど見えにくくなる。木下論文が掲載している二葉の写真は、ひとつは紀ノ川の南岸からの撮影である。当時の道筋は南岸には

ない。もうひとつは「船岡山の上流約一・五キロの北岸」からの撮影である。現在も上流の三谷橋からは三山の並びがよく望見できる。しかし現在の紀ノ川沿いは、当時は川床か氾濫原であって、道はなかったはずである。

もっと北側の山際を通っていた。もちろん歌の世界における想像力、あるいは万葉びとの豊かな比喻表現を無視してはならないことは承知している。ただ当該歌はここを道行く旅びとの詠であるだけに、詠歌の基盤となる風景（旅びとのまなざしが捉えた風景）は、しっかりと押さえておくという立場を本稿は取りたい。

いかにも散文的であるとの譏りを甘受したうえで、当該歌の打橋は、勢能山と妹之山の間にかけて丸木橋と思わざるをえない。もちろんこの丸木橋として、背を受け入れようとして妹が渡した橋として見立てられて歌われていることは言うまでもない。現在、背山の二峰の間には大きくくびれた谷がある。この谷の底は川石である。木下論文は「有史以前の或る時期までは妹背山は連なっていた。（中略）地質の面から見て、背山・妹山とも基盤岩の上に洪積層が乗った形である」と指摘している。本稿も、かつて和歌山大学の故原田哲朗教授（地質学）から、紀ノ川は太古には背山・船岡山・長者屋敷・北山に堰き止められて湖を成していたのだと、同趣旨の教示を得たことがある。背山の二峰のくびれはそのなごりであろうか。

10の一二〇九番歌における「紀の川の辺の妹与背之山」という表現は、二山が紀ノ川の対岸に位置しているも、同じ側の岸に位置している、どちらでも可能な表現である。

11の一二一〇番歌は、二山仲よく二並ぶ妹与勢能山を見て羨ましいと歌っているのであるから、紀ノ川を隔てて対岸にある二山であるより、二つの峰が仲よく連なっている山容の方が、歌意にふさわしい。当時は川を渡ることが大変なことであり、それゆえに恋人が渡りやすいように打橋を渡すのであったことを思えば、ましてや紀ノ川という大河を目の前にした旅びとの感慨であってみれば、「ともしくも並び居るかも妹与勢能山」の表現に

ふさわしいのは、二峰二並ぶ風景であろう。

12の二二〇八番歌は、「我が越え行けば」とある。越えたのが勢能山であることは、1、2、3の題詞に「勢能山を越ゆる時」とあり、また5の二九一番歌の「勢能山の歌」に「我が越え行けば」とあるところから確認できる。また4の一六七六番歌の「勢能山に黄葉常敷く」は、勢能山の黄葉を實際に踏みしめているところから出た表現であると理解される。12の歌において、今越えて行く勢能山から眺めて、「妹に恋ひずて」（妹に恋い焦がれずに一緒にいることができて）という詠出が可能なのは、紀ノ川を隔てて対岸にある長者屋敷が妹之山である場合よりも、背山の二峰のひとつが妹之山である場合の方である。

13の二二一番歌の「妹があたり今そ我が行く」という表現は、川を隔てた妹山であっても可能であるが、二峰の場合の方がより身近に切実に妹が感じられると言えよう。

最後に15の三三一八番歌について見る。「妹乃山 勢能山越えて 行きし君」の表現に触れて、木下論文（前掲）は次のように述べる。

南岸の妹山と北岸の背山とを何用あって二つも越える必要があらうとも思えず、事実無根の「言葉のあや」と言われてもしかたのない例である。だが歌の世界の論理はこの種の合理主義に屈するものでない。ましてや、この歌は、紀伊に旅立った夫を大和にあつて待つ妻女の歌（ということになっているの）である。音に聞く妹背山を引いてはいるが、実見していなければこの程度の誤りも避けがたい。

さきの9の一八九三番歌の打橋の場合と同じく、歌の世界における想像力と創造力を蔑ろにしてはならないことは肝に銘じなければならぬが、背山二峰説の立場からこの歌を診るならば、「妹乃山勢能山越えて」という表現は、「妹があたり今そ我が行く」（13の二二一番歌）という表現とともに、より無理のない自然な表現である

と言えよう。

二一五 妹之山の所在―妹山―長者屋敷説の由来―

では妹山―長者屋敷説はなぜ通説となつたのであろうか。それは妹山の所在について触れた先行研究が、古今集の妹背の山の歌を基にして考えたことによる。顕昭と契沖の発言を見よう。

一、いもせの山

ながれてはいもせの山の中におつるよしの、河のよしや世の中

顕昭云、いもせの山とは紀伊国にあり。芳野川を隔ていもせの山とて二山の有也。昔いもとせうと、河を隔て中のさかひを論じけり。遂に妹かちてせの山の方近く掘て吉野河はながしたりと云。彼いもとせうと、此二山の上にてたてるによりて此名を付たり。但此いもせの山の中に小山あり。それをいもせ山と云とぞ彼国の土民申ける、おぼつかなし。考^二萬葉^一云、

せの山にたゞにむかへるいものやまことゆるすかもうちはしわたる

これやこのやまとにしては我こふるきぢにありてふ名におふせの山

わぎもこに我こひゆけばともしくもならびみしかも妹与勢能山

此等の歌の心ならば、いもせの山別の山別歟。

(顕昭「袖中抄」〔卷第十四〕〔文治二年二八六、三年頃の成立か〕)

流てはいもせの山の中に落る吉野の川のよしやよの中

先、妹背山は、妹山と背山とふたつをつ、けていへるなり。万葉に、せの山にた、にむかへる妹の山とよめり。紀の川をへたて、兄山は北に、妹山は南にあり。紀川は吉野川の末なれば、流てはといへるにて、中に落ちる吉野川といへることわりたかはず。妹背河も、紀川は惣名にて、ふたつの山のあはひを行ほと別名と知へし。妹背山吉野にあるやうによめる歌ともは、万葉を能見す、右の古今の歌に、なかれてはといへる心を得ざるなるへし。

(契沖「妹背山川」〔勝地吐懐編〕)

いずれも古今集の歌を冒頭に掲げて考証が始まっている。古今集の巻第十五、恋歌五の部の八二八番の歌である。

題しらず

読人しらず

ながれては妹背の山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

この歌は妹背の仲が疎遠になってしまい、流す涙が吉野川となって、妹山と背山との間を裂いて激しく落ち流れていくさまを歌っている。

古今集の恋の部は、恋の初期段階から末期段階へと、恋の経過を追った配列がなされている。当該歌は「恋歌五」(古今集の恋の部は一〜五までの五部から成る。したがって恋歌五は恋の末期段階に属する)の、しかもその中でも最末尾に配列されている。この配列位置から言っても、「吉野の川のよしや世の中」という表現からは、この世の男女の仲に疲れ果てて諦めの境地に入っている、作者の心情が伝わってくる。この心境を効果的に表現したのが、妹山と背山の間を割って激しく流れる吉野川の風景であったのである。もちろん当該歌の作者は意図的に、二山の間を吉野川を流したのである。ここで「紀の川」ではなく、「吉野の川」を用いたのは、吉野川が

著名な歌枕であったこと、そして古今集では「吉野川の激流に恋の思いの激しさをたとえ」ることが「圧倒的に」多かった(片桐洋一著『歌枕歌ことば辞典』(増訂版)一九九九年、笠間書院)こと、そして「ヨシののかはのヨシやヨのなか」という音の連続を意図したことによるのであろう。

しかし万葉の妹勢能山詠はそういった心情とは無縁である。妹之山と勢能山との間にあって隔てをなす障害には打橋を渡す(9の二一九三番歌)というのである。古今集の当該歌と万葉歌との間には、内容上根本的な相異がある。にもかかわらず、この根本的な相異を無視して、古今集に歌われた、「妹背の山」の風景から、逆に万葉の「妹勢能山」の風景を付度してしまったところに、妹山Ⅱ長者屋敷説の出発があったのである。

なお言えば、その詠まれた心情は大きく異なるものの、古今集の当該歌も、万葉歌と同じく紀伊国の妹背の山を詠んでいると見るべきであろう。古今歌に「吉野の川」とあるが、現代のように奈良県内の流域が吉野川、和歌山県内の流域が紀ノ川というような行政区画を意識しての表現ではない。「流れては」とあるので、「吉野の川」が流れ流れて紀伊国の妹山と背山の間に割って入ったと見たのである。顕昭もそう考えているように、古来そう考えられてきたのであろう。たとえば『夫木和歌抄』(巻第四、春部四)の二一七五番歌(この歌は、中世散佚撰集のひとつである『明玉集』に収められていた歌である)に

河落花 明玉

平泰時朝臣

春たけてきのかはしろくながるめりよしののおくに花やちるらん

とあり、吉野川が流れて紀伊国に至るといふ詠法が、自然な発想としてあったことがわかる。

平安朝以降、古今集は絶大な權威を持っていた。一方万葉集はと言えば、後撰集(天曆五年九五二)の撰者の梨壺の五人が、万葉集を訓み解く作業に従事しなければならなかったように、万葉集が訓めなくなっていた。しか

も古今集の当該歌は

古今伝授秘伝歌の一つ。恨み・執着・諦めなど、読者が、時代時代にそれぞれの思いを託して理解した一首。特に中世人の心を深くとらえたようだ。

(小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』〔新日本古典文学大系〕一九八九年、岩波書店)

とあるように、古今伝授秘伝歌として、重んじられた歌であった。⁶⁾ そうであつてみれば、古今集の当該歌から立ちあがってくる「妹背の山」の山容が、後世における万葉の妹勢能山の山容の理解に、絶大な影響力を持ったであらうことは想像に難くない。

本稿第二節では、万葉の妹勢能山は都からの旅びとが作り上げ命名していった山であること、妹勢能山は背山の二峰を詠んだものであると見るのが最も適切であること、そして妹山ニ長者屋敷説は、古今集の歌の影響によるのであろうことを述べた。以上述べきたった大筋の趣旨は、本居内遠が「妹山背山弁」においてすでに指摘したところであり、本稿はそれをさらに種々の側面から検証したに過ぎない。先人の先見を敬仰し、これまで村瀬自身も通説に依りつづけたことを省みつつ、妹勢能山ニ背山二峰説を支持したい。

三 編纂論上の諸問題

三一 人麻呂歌集所出の妹勢能山詠ニ吉野説の検討

前節では、万葉集に詠まれた妹勢能山歌について、勢能山単独詠に次第に妹山詠が加わっていく経緯を、妹勢能山の所在・山容の問題とも関わって考察した結果、妹勢能山詠の出現をほぼ時間軸に沿って説明できた。とこ

ろがこの時間軸に沿ったのでは説明のしにくい歌がある。通し番号14の一二四七番の人麻呂歌集所出歌である。稲岡耕二著『万葉表記論』(一九七六年、塙書房)、『万葉集の作品と方法』(一九八五年、岩波書店)、『人麻呂の表現世界』(一九九一年、岩波書店)等の重厚な研究は、人麻呂歌集が天武朝から持統朝初期にかけて人麻呂自身の手によって筆録されたものであること、そしてその大部分が人麻呂自身の関与した作であることを明らかにした。

当該の一二四七番歌は人麻呂歌集略体歌(古体歌、詩体歌)である。稲岡著書によれば、古体歌は人麻呂歌集の中でも初期に属する。とすれば当該歌は、妹勢能山詠十五首の中でも最初期の詠に位置づけられることとなる。前節で見た範囲の内で言えば、この時期に妹山は詠まれていない。しかるに当該歌には妹勢能山が詠まれている。とすると妹山が例外的に早く詠まれた例ということになる。逆に持統朝には妹山がまだ歌に詠まれていないという前節での結論を基にしていえば、人麻呂歌集には平城遷都以降の歌も含まれている可能性があるということになる。ここに妹勢能山詠の問題のひとつがある。

人麻呂歌集の実態の問題は、すぐれて万葉集編纂の問題でもある。伊藤博著『万葉集の構造と成立』(上・下)(一九七四年、塙書房)が明解明晰に説いたように、万葉集は「古」と「今」との対比構造をも有している。その「古」の部分を担当する有力な存在が、人麻呂歌集である。もし当該歌が天武・持統朝ではない、平城遷都以降の新しい時期の作であるとすると、この歌は「古」を担当する歌とは言い難いことになる。

この問題にひとつの明解な解答を示したのが、稲岡耕二論文「大名持神社と人麻呂歌集」(『萬葉』第一八八号、前掲)であった。稲岡論文は、本稿二一五で検討した、古今集巻第十五「恋歌五」に収められた歌

ながれては妹背の山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

の「妹背の山」は、紀伊国の妹背の山ではなく、吉野のそれであり、また当該古今歌が、古今伝授秘伝歌として

古代・中世を通じて広く親しまれたことから、「古今集以前、つまり万葉時代から吉野の妹背山は存在していたと考えられる」と認定した。そのうえで、吉野の妹山の麓にある「大名持神社」（大和国吉野郡、祭神は出雲の大己貴神〔大国主神〕）は斉明朝に勧請された、古代から社格が非常に高い神社であり、また持統天皇の吉野行幸の道筋にあったとの先行研究（和田幸「倭成す大物主神」『大美和』第一〇五号、二〇〇三・七、大神神社発行）を踏まえて、「人麿歌集古体歌に見える「妹勢能山」は紀伊国ではなく、

大名持神社の社殿背後に見える妹山と、吉野川をはさんで対岸の背山を詠んだものであった。斉明朝に勧請された国土経営の神「大名持（大穴道）」を祭る社と密接な関係にあったから、人麻呂の想像はおのずから国土創成期にまで及び、以後ながく夫婦親和の範型としてありつづける二山に対する讃嘆の心を表わしたのである。

と結論づけた。つまり、人麻呂歌集所出の14の一二四七番歌に歌われた「妹勢能山」のみが、万葉集の他の妹勢能山（紀伊国）とは所在を異にした、吉野の妹勢能山であると認定したのである。このように考えるならば、14の一二四七番歌のみが、万葉集における妹勢能山詠（紀伊国）の時間軸から外れるという問題は、すつきりと解消されることになる。

しかし14の一二四七番歌のみを、そのように吉野の妹勢能山を詠んだものと考え、ことに躊躇される点も少なくない。まず、斉明朝に勧請されたと推定される「大名持神社」の存在は、『延喜式』「神名帳」に明確に確認されるものの、「妹山」「背山」の存在の確認が十分に出来ていないとは言い難い。ここでも古今集の「ながれては」の歌がひとつの決め手になるわけであるが、この歌とて吉野の「妹山」「背山」の存在を伝えるものとは言い難いことは、先に二一五で見たとおりである。

さらにもし当該一二四七番歌の妹勢能山が、吉野のそれであるなら、吉野行幸の道筋に面して在る妹勢能山が、なぜ万葉集にかくも唯一孤立して存在するのか。しかも持統朝には三一回とたびまねく吉野行幸が実施されたのである、もつと関心がはらわれ、歌に詠まれてもよいはずではないかと思われる。すでに持統四年に、阿閉皇女が「大和にしては我が恋ふる紀路にありといふ名に負ふ勢能山」(一の三五番歌)と詠んでいるのであるから、持統天皇の吉野行幸時に、吉野にも「勢能山」が存在したのなら、同名の「勢能山」が注目されてしかるべきであらう。しかし万葉集には他に一首も見出すことはできない。

また巻七の編纂・構成という面から見ても疑問は残る。当該一二四七番歌は、巻七雑歌部の中の「羈旅作」(⑦二一六一〜二五〇の計九〇首)の項に収められている。この「羈旅作」の項の前には、「芳野作」(⑦一一三〇〜一二三四の五首)、「山背作」(⑦一一三五〜一二三九の五首)、「摂津作」(⑦一一四〇〜一二六〇の二一首)が配されている。

当該一二四七番歌を冒頭に据えた、人麻呂歌集所出の四首歌群(⑦一二四七〜二五〇)は、渡瀬昌忠著『萬葉集全注』(巻第七)(二九八五年、有斐閣)が指摘するように、「巻七撰者によって、一首ずつばらばらに、人麻呂歌集のあちこちから抜き出されて、ここに並べられたもの」ではなく、「人麻呂歌集の略体歌部において、この四首は明確な羈旅作たる一二四七に率いられてまとまっていた」「旅の宴席で語られる歌として人麻呂によって作られた、四首一組」の歌群であったと思われる。そしてこの四首歌群が「羈旅作」の項の中に収められたのは、同じく「羈旅作」の項の中に五首(⑦二一九三、二二〇九、二二一〇、二二〇八、二二一一)連続して収められている⁽²⁾、紀伊国の妹勢能山歌群に引かれてのことに違いない。

もし当該一二四七番歌の妹勢能山が、吉野のそれであったなら、当該四首歌群は「芳野作」の項に収められたはずである。ちなみに「羈旅作」の項の中に、吉野での作は一首も収められていない。「芳野作」の項に収めら

れた五首の歌をみると、「見ればかなしも」(一一三〇)、「今日見れば」(一一三二)、「うつつにも見てけるものを」(一一三三)、「我かへり見む」(一一三三)と、吉野の地を見ること、それはとりもなおさず吉野の地を讃えることであつたが、そこに重きを置いて歌っている。当該歌も「見らくしよしも」と、妹勢能山を讃えている。これは人麻呂が吉野で詠じた「水そそぐ 瀧の都は 見れど飽かぬかも」(①三六)と同様の表現である。当該一二四七番歌が、吉野の詠であつたなら、巻七編者は迷うことなく、「羈旅作」の項ではなく、「芳野作」の項に組み込んだはずである。しかるにそうなっていないのは、当該歌は吉野の作ではないと、少なくとも巻七の編者はそう判断したためであると考えられる⁽⁸⁾。

以上のような疑問とその検討の結果、当該の一二四七番歌の妹勢能山が吉野のそれであると認定することには躊躇せざるをえない。吉野の妹背の山が市民権を得る可能性が出てくるのは、古今集の「ながれては」の歌(ただし前述のとおり、本稿はこの歌に詠まれた妹背の山も、紀伊国のそれであると考える)を待たなければならなかつたと思われる。

三一 一 人麻呂歌集所出の妹勢能山歌が提起するもの

前項三一で検討したように、人麻呂歌集所出の一二四七番歌の妹勢能山を吉野の地に求めることには慎重でありたい。とすると、一二四七番の妹勢能山詠が、万葉集における妹勢能山詠の時間軸から外れているという問題は振り出しに戻ったことになる。一二四七番歌の表現・内容の具体に即して考えるほかはない。

岩下武彦「人麻呂歌集古体歌の位相―「妹勢能山見吉」(7・一二四七)の解釈をめぐって―」(『フェリス女学院大学国文学論叢』〔日本文学創設三十周年記念〕一九九五・六)は、当該歌の「見らくしよしも」という土地讃めの表現

を対象として考察し、人麻呂歌集の位相を確かめた。岩下論文は、記紀歌謡をはじめとする土地讃めの詞と、当該歌の「見らくしよしも」とを比較対照し検討して、次のように結論づけた。

一二四七歌は、(h) (記紀語41) や (i) (記紀語53) の呪的発想を記載のレベルで脱け出した所で、「見る」ことによって讃める段階から、「見る」ことを讃め、そのことを通して見える対象を讃める表現へと変容したのだと言える。ここから、人麻呂作歌の「見れど飽かぬかも」という讃めの言葉までは、もうあと一步と言つてよいだろう。

記紀歌謡等の土地讃め詞章を脱して、歌の記載段階に入った人麻呂歌集の新しさを確かめた。

神野志隆光「羈旅歌覚書―人麻呂歌集をめぐる―」(上田正昭・南波浩編『日本古代論集』一九八〇年、笠間書院)は、「七世紀の段階で、律令国家へむかおうとする中央集権国家の実現していく新しい〈交通〉において、新しい質の旅の状況がもたらされる」なかで、それを「口誦から記載へと転換しつつある歌が、どのようにひきうけていったか」という視点で羈旅歌を見通そうとした論である。この中で当該一二四七番歌を含む四首(⑦一二四七―一二五〇)および巻十二「羈旅発思」部に収められた人麻呂歌集所出の四首(⑫三二二七―三三三〇)を組上のほせて、人麻呂歌集略体歌の段階では、巻七、巻十二の編者が「羈旅作」として採択するに十分適う歌はまだほとんど無かったこと、「旅の歌を、編纂上の要求から人麻呂歌集より採らうとするとき、奈良朝の感覚と歌集歌との落差」が働いたことを指摘した。

以上の二論は、いずれも人麻呂歌集略体歌を、口誦から記載へと転換しつつある段階のものとして位置づけることを、表現・内容・当時の社会状況の具体に即して確かめている。二論の貴重な指摘をめぐって、本稿の関心事に引きつけて述べれば、まず岩下論文が、「見る」ことよって讃める段階から、「見る」ことを讃める

段階への姿容を見通したことはよく理解でき納得できるが、ただ当該一二四七番歌の「見らくしよしも」の表現について、この表現は、人麻呂作歌の「見れど飽かぬかも」の表現へ至るまでの「もうあと一步」のところにあると位置づけたことに對しては、そのように限定して規定できるのかどうか、疑問が残る。両者は少なくとも同一のレベルの表現と見てよいと思う。あるいは「見れど飽かぬかも」という宮廷讚歌における慣用的表現を引き取りつつ、もう少し肩の力をぬいて詠まれたのが、「見らくしよしも」ではなかつたか。

また神野志論文が、人麻呂歌集略体歌のうち、当該一二四七番歌と、同じく「羈旅作」の項に収められた一一八七番歌、そして卷十二の「羈旅発思」の部に収められた三二二八番歌の三首のみが、「旅の作」と言える数少ない例だと指摘していることも重要である。旅の歌という観点から言えば、当該一二四七番歌は、人麻呂歌集略体歌の中にあつても例外的な存在であつたのである。旅の歌が広く歌われ一般化した時期（万葉後期）の歌と同じ性格を、当該一二四七番歌はすでに有していたのであつたと、本稿なりに理解することが出来る。

また当該歌の「大穴道少御神の作らしし」という表現にも注目したい。この国作りの二神を取り上げて詠んだ歌は、万葉集中他に三首見える。

大汝小彦名のいましけむ志都の石室いはやは幾代経ぬらむ

③三五五、生石村主

大汝 小彦名の 神こそは 名付けそめけめ 名のみを 名児山と負ひて 我が恋の 千重の一重も 慰めなくは

⑥九六三、大伴坂上郎女

於保奈牟知 須久奈比古奈の 神代より 言ひ継ぎけらく 父母を 見れば貴く 妻子見れば 愛かなしくめぐ

し……

表現と発想を当該一二四七番歌と共有するが、この三首はいずれも万葉後期の作である。この三首が一二四七番歌の影響下に作られたと考えることも出来るが、さりとてこの表現と発想に古層を見なければならぬものでもない。

また妹勢能山は、「妹背乃山」(6の五四四番歌)、「妹背之山」(7の二一九五番歌)、「勢能山・妹之山」(9の二一九三番歌)、「妹与背之山」(10の二〇九番歌)、「妹与勢能山」(11の二二〇番歌)、「勢能山・妹」(12の二二〇八番歌)、「妹乃山・勢能山」(15の三三二八番歌)と記されているが、当該歌の「イモセノヤマ」と同じ呼称を持つのは、6と7の歌である。この二首は、神亀元年の作で、十五首の中で最も新しい時期のものである。「イモトセノヤマ」ではなく、当該歌の「イモセノヤマ」という連続したこなれた呼称からは、山名がすでに人口に膾炙していたことを思わせる。

以上当該一二四七番歌の表現と内容に即して検討を加えた。大筋として言えることは、当該歌には、人麻呂歌集略体歌について、一般的に言われている「古さ」に比して、もう少し後期的な新しい要素があるということである。しかしながら本稿は、だからと言って、当該歌が人麻呂歌集所出略体歌であるにも拘わらず、万葉後期の作であるということを主張しようとしているわけではない。

前稿「巻十一・巻十二の場合―類歌をめぐる―」(『萬葉集編纂の研究―作者未詳歌巻の論―』二〇〇二年、塙書房)。

初出は一九九九・二二で、人麻呂歌集歌と出典不明の作者未詳歌とが類歌関係にある歌々を取り上げて、両者に類歌関係が生ずる様相を観察した。結果、両者の関係は、人麻呂歌集から作者未詳歌へという一回的一方的な影

響継承関係にあるものもあるが、多くはもつと広範で柔軟な継承流動の影響関係であろうこと、すなわち伝誦（人々の口と耳と頭の中にあつた歌の、継承流動の過程をいうが、一部は書承という過程もあつた）の過程で、広くゆるやかに生じていったものであろうと考へた。人麻呂歌集の歌同士の間に類歌関係にあるものがあること、あるいは異伝が存在することは、人麻呂歌集そのものも継承流動という伝誦の波をかぶっていることを意味するのである。

また伊藤博「万葉集の成り立ち」（『萬葉集釋注』〔十一、別巻〕一九九九年、集英社）は、人麻呂歌集には三種が存在したと推定している。ひとつは「常体（非略体）朝臣人麻呂歌集」、ひとつは「詩体（略体）朝臣人麻呂歌集」、そしていまひとつは、上記二集が伝来の間に異同や増幅をうけて成り立った「異本詩体・常体朝臣人麻呂歌集」である。このように個々の人麻呂歌集が伝誦の波をかぶっているとともに、歌集そのものも伝来上の変容の波をかぶっている可能性があるのである。伊藤論文は、三つ目の「異本詩体・常体朝臣人麻呂歌集」はおもに卷十二の供給源となつたと考へているが、当該一二四七番歌の収められた、卷七雑歌部の後半に採られた人麻呂歌集もその可能性なしとしない。というのは、卷七の雑歌部は前半部（⑦一〇六八―一二二九の詠物の部）と、後半部（⑦一一三〇―一二九五の羈旅の部と雑の部）に分かれ、両者には編纂上の隔たりがある。後半部は、前半部の編纂の過程で浮上してきた編纂方針の変容によつて編まれたと思しく、歌を先行歌集からほとんど原資料のままに一括して採録しているのである（前稿「卷七雑歌部の編纂―萬葉集編纂の研究」〔前掲〕。初出は一九八二・三三）。略体歌にはもとほとんどのない旅の歌は、こうした異本人麻呂歌集にあつたことも考へられるのである。

当該一二四七番歌と同じく、「羈旅作」の項の中に収められている一一八七番歌は人麻呂歌集略体歌である。神野志論文（前掲）が略体歌中の数少ない「旅の作」と指摘した歌である。この歌は、前後に羈旅歌が居並ぶ中、

「右一首、柿本朝臣人麻呂之歌集出」の左注を付されて、一一八六番歌の次に置かれている。このあり方について、伊藤博「人麻呂集歌」の配列―巻七―巻十二の論―」（『萬葉集の構造と成立』上）一九七四年、塙書房、初出は一九七一・一二は、次のように考えた。

この一首は出典不明歌の中にも人麻呂集詩体歌の中にもあったもので、そのことに気づいた編者が、人麻呂集の方を重視して、出典不明歌の方の表記を詩体歌の方のそれに改めた上で、人麻呂集所出であることを注記したと見るべきでないか。

本稿もこの推定に賛成する⁽⁹⁾。そうであれば、一一八七番歌は、人麻呂歌集略体歌が作者未詳歌の間に広く流布し享受継承されていたことを示す格好の例ということが出来る。略体歌の中でも同様の位置にある、当該一二四七番歌であつてみれば、同様のこつこつした伝誦流布の過程を有していたと見ることが出来る。一二四七番歌に見えた、ある種の「後期的な新しさ」も、こつこつした人麻呂歌集歌の広範で柔軟な継承流動の中に生じてきた「後期的な新しさ」であつたのではないだろうか。

人麻呂歌集に、勢能山ではなく妹勢能山を詠んだ歌が含まれていることの問題については、あるいはこうも考えることが出来る。そもそも一三〇〇年前という時代の、時間と空間の膨大な広がりを感じる時、そして残された資料はその膨大な時間と空間の中の芥子粒のひとつに過ぎないことを思う時、十五首の妹勢能山歌を一筋の縄で括ろうとすることの危うさを思う必要があるのではないかということである。例えば天武朝に勢能山から「妹」を連想した人がいてもよかつたのではないか。一二四七番歌の作者は、国作りの神「大國主の神」を「大穴道」と呼んで「山を作つては大きな穴を道に歩いて歩いた巨人のイメージ」（渡瀬昌忠著『萬葉集全注』（巻第七））をふくらませるほど想像力の豊かな人であつた。勢能山に、男女二神が組みを成して生まれてくる神生み国生み神話を

想うこともあり得たであろう。そしてその発想のもとに詠まれた歌が、例えば丹比笠麻呂、春日藏老たちの耳に触れないこともあり得たであろう。膨大な空間を擁した世界であり、しかも情報のごく限られた世界での出来事であったのである。実際10の一二〇九番歌のように、妹与背之山を兄と妹との間柄として詠んで（一人にあらば母が愛子そ）、他とは世界を異にする妹勢能山詠も共存していたのである。本稿が見てきた時間軸にはこうした柔軟な許容範囲も残しておく必要があると思われる。

おわりに

妹勢能山の歌をめぐる、その山容と所在の問題、時間軸に沿った詠歌のありようの問題、そこから生じる人麻呂歌集所出歌の編纂論上の問題等を考えた。本書のテーマである「編纂・構成」について言えば、人麻呂歌集所出の妹勢能山の歌が提起しているのは、万葉集の編纂を一筋の縄で括りきってしまうことの危うさであるように思われる。

注

- (1) 通し番号2、3、4、5については、その順番は確定できない。2、3を4の前に位置づけたのは、3の作者が選俗して、弁紀改め春日藏首老と名乗ったのが大宝元年三月（続日本紀）であったことによる。便宜的な措置である。5の小田の歌については、稲岡耕二「大名持神社と人麻呂歌集—人麻呂の工房を探る（其の三）—」（『萬葉』第一八八号、二〇〇四・六）の考証とその結論に依った。ただし、たとえ2、3、4、5の順序が変わったとしても、本稿の論旨に支障はない。

- (2) 歌番号が連続しないのは、「羈旅作」の項の一部(⑦一一九四―二二〇七)の歌の配列順序の原形が、「国歌大観」の歌番号の順序と異なるためである。それは「国歌大観」の依った寛永版本(その原型は大矢本)のその部分に錯簡があったことによる。またこれとは別に、一一二〇九、一一二一〇、一一二〇八番歌についても、この順序が原本の姿であろうとの澤瀉久孝著『萬葉集注釋』(巻第七)(一九六〇年、中央公論社)の指摘に従った。
- (3) もっとも当該の一〇九八番歌は、紀伊道の妹之山については、世間のうわさを基にして歌っているのであるから、実際の景観と比較して判断を下すことには疑問もあるう。しかしそのうわさは実際に妹山を見た人の実体験を基にして語られているのであるから、実際の景観との比較は意味を持つと考える。
- (4) 河岸段丘に沿った道筋には、松山加持水、丁の町流れ井戸、茶屋出流れ井戸、森井戸といった古くからの井が残っており、今も清水が湧き出ている。また法起寺式の伽藍配置を有していたことから、奈良時代前期の建立が確かめられた佐野(狹屋)廃寺跡(『日本霊異記』にも「狹屋寺」として登場する)もこの道沿いにある。さらに神護寺領紀伊国栲田莊絵図に描かれている宝来山神社もある。神社の入り口には、今は根本の株を残すのみであるが、「船つなぎ松」と呼ばれる松があった。『紀伊統風土記』(仁井田好古編、天保十年(一八三九)成立)は「古道は村中(萩原村)宝来山明神の社前を過ぎて兄山の北の方を越えたりといふ。今明神の境内に舟繫松フナヅキといひて、往古舟を繫きし古松といひ伝ふ。是に因るに古は河筋も今の街道よりは北なりし事明なり」と記している。
- (5) なお言えば、筑波山は男体山・女体山の二峰を持つが、この二峰の山容を意識して歌に詠んだのは、都からの旅びとである丹比国人(③三八二)であり、高橋虫麻呂(⑨一七五三。二峰を男神ひこかみ・女神ひめかみと詠む)であって、いわば地元の人々の詠である東歌・防人歌には詠まれていない(村瀬憲夫著『万葉びとのまなざし―万葉歌に景観をよむ―』二〇〇二年、塙書房)。
- もちろんかつては「嬭歌会」の行われた土地であるから、その地に住む人々は二峰を男と女と見ていたのであるが、東びとにとって二峰は空気のような存在であったのであろう。旅びとは異国の山の二峰に接した時、その山容にとりわけ強い関心をいだいたのである。また⑧の一〇九八番歌も、異国(紀伊国)の地にある妹山に触発されて、大和国の二上山の二峰に目をとめた歌である。
- (6) 『古今秘注抄』『古注上』『古今鈔』『古今集聞書』『難波津泰謔抄』『口伝』といった中世の注釈書に当該古今集歌が取り上げられている。例えば『古今秘注抄』に「紀伊国ニイモノ山セノ山トテ吉野川ヲヘタテ、サシ向テ二ノ山アリ。(中略)

一説ニハ此山ノ外ニイモセ山トテ侍リ。ケニモタ、一ノ山ノヤウニイモセ山トヨミ侍リ」といった注目すべき指摘がある。
 (7) 村瀬憲夫著『万葉の歌一人と風土』(◎和歌山)(一九八六年、保育社)、『万葉和歌の浦―若の浦に潮満ちて―』(一九九二年、求龍堂)、『紀伊万葉の研究』(一九九五年、和泉書院)、『万葉びとのまなざし―万葉歌に景観をよむ―』(二〇〇二年、塙書房)は、多少のためらいを示しつつも、いずれも妹山ニ長者屋敷説を取っている。

(8) 一二四六番歌の左に記された注「右件歌者古集中出」の、「右件」がどこまでを指すのかは、巻七の編纂を考える時、重要な問題であり、橋本達雄『万葉集巻七「古集」の範囲』(『万葉学論攷』(松田好夫先生追悼論文集)一九九〇・四、続群書類従完成会)が諸説(計六説)の問題点を簡潔に整理しまとめている。もし「右件」の指す範囲に「芳野作」も含まれるという説に依るとすると、「古集」から一括して採択された歌群の中に含み込まれている「芳野作」の項の冒頭かもしれない。末尾に、人麻呂歌集の四首歌群を付加することは難しかった、それゆえ「古集」から採択された一群の後、すなわち今ある位置(一二四六番歌の後)に配されたと考えることになる。ただし本稿は「右件」の指す範囲をそのようには考えない。一
 一九六番歌以下を指す、すなわち「芳野作」は「古集」所出ではないと考える(前稿「巻七雑歌部羈旅歌群の配列」『万葉集編纂の研究―作者未詳歌巻の論―』二〇〇二年、塙書房。初出は一九八〇・八)。したがって当該の一二四七番歌がもし吉野の作であったなら、この歌を「芳野作」の項に組み込むことは出来たはずであると考える。

(9) この伊藤論文の推定に対して、渡瀬昌忠著『萬葉集全注』(巻第七)は、「そんな編集手法を窺わせる例は他になく、従いがたい」と批判して、「あびさする海人……」という歌い出しが前歌の「あさりする海人……」の歌い出しと共通なので、人麻呂歌集から取り出して、ここに補入したもの」と考えた。しかしもし巻七がそのような編集方法を取っていたのであるならば、同じく人麻呂歌集略体歌所出の一二四七番歌(ないしは一二四七―一二五〇の一連の四首)も、「羈旅作」中の妹勢能山歌群の前か後に補入されていたはずである。本稿は伊藤論文の推定をよしとする。